

科目区分 教科専門

授業科目名

A キャリアデザイン論Ⅱ（2回生対象:9名）

B 哲学1（2回生対象：学校教育12名、人間社会デザインコース他10名）

「共 common」の領域の構築に向けて3

I 授業評価（5段階：a 良い～e 悪い）

(1) 授業アンケートから(A/B)

問1 この授業に積極的に参加したか。

a 2/1 b 5/12 c 2/8 d 0/1 e 0/0

問2 学びの意欲を喚起したか。

a 2/4 b 6/9 c 1/8 d 0/1 e 0/0

問3 この講義のテーマ・目的は明確か。

a 1/1 b 8/16 c 0/3 d 0/2 e 0/0

問4 学生同士の話し合いの意義

a 7/5 b 1/12 c 1/4 d 0/0 e 0/0

問5 学生の発言への寿の対応

a 5/6 b 4/15 c 0/1 d 0/0 e 0/0

問6 教材選択の妥当性

a 3/3 b 5/14 c 1/5 d 0/0 e 0/0

問7 授業のレベル

a 0/0 b 7/4 c 2/13 d 0/5 e 0/0

問8 この講義で得るものはあったか。

a 5/7 b 4/13 c 0/1 d 0/1 e 0/0

問9 この講義のおすすめ度

a 5/5 b 2/11 c 2/6 d 0/0 e 0/0

問10 良かった点、改善すべき点

A 〈良かった点〉

・これから社会に出ていく上で、大切なことを学べた。様々な年代、考え方の資料を毎回提示して下さるので、自分の視野が広がりました。

・あえて重たい話をする事で将来に対して漠然とでも考えを進めていく必要があると感じたこと。

・学生同士の話し合いが設けられていた点。

〈改善すべき点〉 特になし

B 〈良かった点〉

・難しい話に触れて考えを深めた点。

・講義後のコメント提出をすることで、講義の振り返りができる点。

・“死”という誰しも直面する事象に対して、どう生きるべきなのか自分なりに考察を深められた点。

・さまざまな考え方ができるようになった。

社会科教育講座 倫理学・哲学 寿 卓三

・世界の新しい見つけ方を見つけられたこと。

・普段の生活の中では深く考えないことを考える機会があったこと。

・毎回の他人のコメントを見れたこと。

〈改善すべき点〉

・席を決める or 毎授業席をランダムに設定し話し合わせる。

・難しいものが多く、全てを理解できたとは言えない。

・メールでの出欠確認だと、出席しても忘れてしまった場合がづらい。

(2) レポートの抜粋

レポートはここ数年、各自で自由にテーマを設定して論述するという形式をとっている。それぞれが講義の中で感じた問題を固有な視点から論じつつも、そこから「学びの共同体」の生成を意識すると同時にこの共同性が学びの高度化・実質化にとって不可欠なものであり、さらには大学での学びを現実の暮らしに繋げることが必要だということを実感してもらおうことが私の講義の基本目標である。このような目標の到達度を測る指標として、レポートの一部を紹介し、諸賢のご叱正を仰げれば幸いです。

A 今、企業が私たちに求めている能力に様々な状況に対応できる応用力がある。応用力は根底ではすべての力とつながっており、すぐに身に着けられるものではない。日々の生活の中で、自ら意識的に行動しなければこの力をつけることは困難である。それに加えてこれまでの学校での学びではこの力は重要視されてこなかった。実際に自分の高校時代までの学ぶ姿勢を振り返ってみると、学校から与えられた教科書に従い授業で教えられることを自分の中に取り込んでいくという、完全に受け身の姿勢で学んでいた。大学の授業ではじめて能動的な学習をおこなうようになり、自分の意見を述べたり難しい問題に思考したりするなかで、今ようやく力が身に着きつつあるように感じられる。学びとは本来そう言うもので、単に知識を習得していくので

はなく、自分の人生を豊かにするために学んでいくのだと実感している。また、学校の授業だけではなく日々の生活の中でも多くのことを得られる。コミュニケーション能力や自分の心のコントロールの仕方は、日常で遭遇する場面において鍛えられる。こうした学校や日常生活の出来事が自分の成長につながっていて、そこで身につけた能力が就職活動でも役に立つ。つまり、「よそいきの自分」「つくりものの自分」ではなく、日々の生活を通して「本当の自分」を磨くことで就職活動でも有利になると考えられる。

B テーマ「二つの「あい」について考える」

「あい」という文字をみるといくつかの言葉を思い浮かべることができると思う。その中で今回話題にするのは2つの「あい」だ。それは英語の「I」そしてもう一つは日本語の「愛」だ。(中略)

結局は自分を証明してくれるのは自分ではなく他人、世界だということだ。つまり自分という存在を証明してくれる絶対的なものはなく、自分がどんな性格で、どんな行動をしようがそれを観測する他者、世界が変われば自分という存在は変わってしまう、相対的な存在なのだと思う。

以上より「私」を定義するものは自我を観測する他者、世界であり自分を自分で定義づけることはできないのだと思う。そして、その定義は相対的であるためにあやふやなものなのだと思う。

次にもう一つの「愛」について考える。それは人の愛とは何かということだ。多くの愛する二人は恋し、結婚し、SEXをし、いつかは子どもを授かるだろう。ならば人間にとっての愛とは最終的に子どもを得ることなのだろうか。(中略)

今までSMのことを取り上げて「愛」について語ったが、結論として「愛」とは「子ども」のように形のあるものではなく客観的には存在しているように見えない主観の中にしか存在しない形のないものだと考える。

今回は二つの「あい」について考えたが「I」は客観の中でしか、「愛」は主観の中にしか存在できないものだと考えられる。

II 講義の総括

若い荻山チキ氏は SYNODOS 新書で「社会をアップデートするために僕らができるこ

と一『僕らはいつまで「ダメだし社会」を続けるのか』一」という論考で「ポジ出し」の必要性を述べている。「ポジ出し」はあくまでも「代案を出していこう」という呼びかけであり、「代案を出せ」という恫喝ではない。なぜなら、「代案を出せ、出さないなら黙ってろ」という為政者がしばしば口にする言葉が、抑圧の肯定に他ならず、「今は代案を出せないが、それだけはゴメンだ、という叫び」をあげることも重要な政治参加だと氏は考えるからである。その上で、メディアのように「代案を出せるはずの立場」にあるものが、政策を提案したり、ロールモデルになりうるものを応援する「ポジ出し」に積極的になることが必要だと主張する。この主張に私は賛同する。そして、このような知性に共感する感性と知性をもつ学生を育てることが文系の学問の課題だと考える。

昨年も書いたように、我々の目の前にいる学生の読解力、聴く力、発話能力の低下は、近年すでに危険水域を越えている。人文科学・社会科学に定位しつつ学校教育に関与する者にとって、読解力、聴く力、発話能力の不足は手足もがれたも同様である。しかし、このような事態を招来した責めはどこにあるのか。我々の多くは、「双方向性」の学びや当事者意識の涵養の重要性を講義で力説しているであろう。しかし、我々の授業そのものが言うところの「双方向性」の授業となっているだろうか。学生同士に議論させれば、双方向性、当事者意識の涵養になると勘違いしていないだろうか。

①講義と話し合いのバランス、②議論の質の高まり、深化を学生が実感できるための手立ての工夫、③個別／小集団／全体という講義の展開の中でより質の高い問いのサイクルの創造といった課題を教員が共有し、創造的協働作業を継続的体系的に展開するとき、しなやかに「ポジ出し」を支える若い知性の誕生を支援する可能性も開けてくるのではなかろうか。

先のレポートに、学生が学ぶ意味を捉え直し、将来の在り方と連動させながら今ここの学び創造する可能性を、さらには、弁証法的思考に依拠して起承転結の形で思考を展開し、所論への反論や別様な可能性を認めつつ、自分の考えを相対化しつつ、一定の自己主張を展開する思考力を修得する可能性を期待するのは老人の戯言にすぎないだろうか。